

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 30 日現在

機関番号：32694

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380715

研究課題名(和文) ヨーロッパ辺境地域における文化の政治が表象する社会空間

研究課題名(英文) Social space represented by cultural politics in European peripheries

研究代表者

定松 文 (Sadamatsu, Aya)

恵泉女学園大学・人間社会学部・教授

研究者番号：40282892

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：グローバル化の中での地域社会の変容を論じる分野において、ヨーロッパの境界地域を対象に、地域文化の越境性と境界性を分析した。具体的にはルーマニア-モルドバ、スペイン-モロッコ-ジブラルタル、ポーランド-カリーニングラド-リトアニアというEUの境界が引かれている国家間の現地調査を行った。それぞれの国の文化が時代ごとの政治的立場において意図的に選択され、隣接する国との差異化を図りつつ、経済的、とりわけ観光で利益を得るためにヨーロッパにつながる文化を表象していることがわかった。また、EUの国境警備は年々厳しくなっており、それぞれの地域で暮らす人にとって不利益をもたらす様相もみられた。

研究成果の概要(英文)：This issue of research is transboundary and boundary of regional/national culture in Europe as social change in globalization. Field surveys in 3 years were Poland-kaliningrad-Ratovia, Rumania-Moldova, Spain-Morocco-Gibraltar. These field research became clear that each regional/national political position intentionally determined their cultures, made them differ from neighbour country, and chose their representations of european culture for economic, especially touristic, interest. In other part, border control of EU is restricted year by year, it brought some inexpediency to people living in these area.

研究分野：社会学

キーワード：地域研究 ヨーロッパ 文化の政治 越境性 辺境 記憶 国境 比較文化

1. 研究開始当初の背景

先行の科研費研究であるフランス少数言語地域の比較研究、ヨーロッパ辺境地域の文化的越境性と差異化の研究でだされた結果より、妥当性を比較検証する必要のある課題として以下の2点が残った。

(1)地域文化は政治的、経済的変動という外的要因により、再解釈される文化や外部資源をしたたかに動員し、再編成されているということがフランス以外の境界地域にも妥当であるか。

(2)EU加盟途上でのEU内外の格差と文化再解釈について、マケドニア以外でも妥当かという課題が残され、ヨーロッパの境界の国/地域において文化の政治化によって特有の社会空間が形成されるか、他の域内外の事例でも検討する必要性。

2. 研究の目的

本研究では、グローバリゼーションの中での地域社会の変容を論じる分野において、ヨーロッパの境界地域を対象に、実践をとおして、文化の政治化が表象する「固有性」と「特異性」によって創られる社会空間、使用価値としての地域の空間表象という点から、地域文化の越境性と境界性を実証的に分析することを目的とした。

具体的には以下2点を研究課題とした。グローバル化、EU統合によって持ち込まれた諸基準や国際市場での競合は、言語やその他の地域文化活動にどの水準で、文化の政治に影響しているのか。地域内外の人に消費される地域文化が、いかにグローバル化されたパッケージや表象(記号)をまとっているとしても、どのように差異と独自性を再構築しながら保てるのか。

「社会空間」(social space)を社会的実践の場所、日常の実践、歴史的物語に結び付けられた実践、交換価値としての機能によって再構造化される対象と再定義し、ヨーロッパの境界において、特に文化に関する行為選択によって文化の表象と文化的行為、文化の選択を政治と経済の要素を取り入れて分析することで、現在の文化を契機に構成される社会空間がきわめて経済的状況や政治的課題をかかえた表象であることを抽出することを試みた。

3. 研究の方法

年2回の研究会で調査計画、先行研究分析、前年度調査の振り返りを行い、年1回の現地調査を行った。

現地調査は当該地域に詳しい研究分担者、連携研究者が計画し、複数人で現地の専門家への聞き取り、歴史的モニュメント、博物館での表象分析、文献収集行い、陸路・海路での越境の様子を参与観察した。

2014年度モルドバ・キシナウ、ルーマニア・ヤシとブカレスト、2015年度ポルトガル(リスボン)、スペイン(グラナダ、マラガ、

アルヘシラス、セウタ)、モロッコ(タンジェ)、イギリス(ジブラルタル)、2016年度ポーランド(グダンスク)、ロシア(カーニングレード)、リトアニア(ヴィリニウス)

4. 研究成果

(1)現地調査からの知見

2014年度

19世紀から20世紀初頭のルーマニア国家建設において、歴史的には民族や文化の多様と混成を内実としながら、ハンガリー、ロシア、トルコ、スラブとの差異化を図る対外関係から、ローマ字表記選択、ローマ起源への依拠、フランスへの政治的権威づけの手法の参照が選択されたことが確認された。

モルドバの歴史的な民族多様性、人工的国家建設の経緯、ヨーロッパとロシアの狭間の地政学リスクによる1つの政治的選択を行うことの難しさの知見が得られた。

ルーマニア、モルドバの言語と国民の海外流出という共通性は見られたものの、EUに加盟しているルーマニアのインフラ整備、ドイツ・フランス等の直接投資による格差ができていたことが分かった。

2015年度

スペイン・マラガ、グラナダ、アルヘシラス、セウタおよびモロッコ・タンジェにおいて、ギリシャ神話、フェニキア植民地等の「ヨーロッパ」起源を遺跡に残し、ムーア人の支配期やアラブ人の支配期の痕跡と今も継承される「遺産」を観光資源として利用しつつ、宗教による差異を差別的境界構築の資源として利用しない日常の混成文化の様相が確認された。

セウタとジブラルタルにおける領有権と要塞から西地中海において、文化的差異の政治化特に境界の政治が先鋭化するのにはユトレヒト条約以降ではないかと推察された。

2015年は特に地中海の難民がヨーロッパへ向かって移動した年であり、11月13日のパリ同時テロ事件の影響がスペイン・モロッコ国境間を緊迫したものにしている。それまでの生活を脅かす移動の制限、実質的な移動の自由の格差は、取り締まりの強化と出入国管理の一部民営化と支配の代行業ともとれる「フロンティア」への加圧の側面も散見された。

2016年度

戦勝国における集合的記憶の形成、政治的・経済的状況の変化に応じた残すべき文化の記憶の変化、国境における権力作用などが確認された。

ポーランド・グダンスク、ロシア・カーニングレードは、第二次世界大戦のナチスドイツとソ連との激しい攻防のあった地であり、戦後からソ連時代にはプロイセン時代の通りの名前、建物は消され、特にカーニングレードにおいては戦車や要塞博物館など

戦勝の記念碑や実物が 48 箇所に点在することが歴史学者であるコーチャシヨフ先生の案内とともに確認された。

一方で、グダンスクとカリーニングラードはかつての自由都市やプロイセンにおける産業や交易の繁栄したダンチヒ、ケーニヒスベルクでもあり、東西対立が緩和された現在ではかつての街の風景の復元が計画され、進められている。世界遺産の登録、2018 年のサッカー W 杯などグローバル基準での文化の価値が記憶すべき街の表象にも影響を与えている。

東西対立時のような厳しさはないもの、ポーランド・ロシア国境及びロシア・リトアニア国境での検問は厳重であり、特に列車で移動において車内でのパスポートと質問の検分は緊張のある境界であることが確認された。また、カリーニングラードは比較的穏やかな国境環境でシェンゲンビザが取りやすくロシア国内からの移住が多いことも教示された。

(2) 越境の現地調査からの知見

「中心」から「辺境」とまなざされる地域の、大国や世界の政治に翻弄される様相と地域の主体性がみいだされた。言語、民俗文化、歴史とその記憶など地域文化と表象されるもの、すなわち書籍、教育、博物館、記念碑等として地域文化の「重要性」「価値」が表象され、それぞれが各地域の歴史を踏まえながらも、特定の時期や特定の出来事を参照しようとする。その特定の時期や特定の出来事の参照は、歴史の中ではかならずしも一定しておらず、各地域の置かれている政治的状况によって、翻弄されつつも地域主体の意志として何らかの自らの立ち位置を表現しようとしている。

本研究の調査対象となったヨーロッパでは、1989 年にベルリンの壁が無くなったあと、EU 統合がシェンゲン協定によって人の移動の自由を保証する空間となり、EU 拡大とともに巨大なヨーロッパの壁が張り巡らされ、シリア等からの難民が急増するこの数年は境界線での攻防は激しさを増している。そして、EU の「辺境」の地においては、EU に加盟するためのあるいはどこに自らの領土を帰属させるべきなのかその文化と歴史の記憶をめぐる葛藤、難民や移民を域内に入らせないための暴力、ボーダーランドに住む人々の日々の交渉などがみられる。

EU 域内では壁をなくし、地域間協力の名の下の地域文化の再解釈が行われているが、EU 未加盟の国では、一方につくと言明すれば一方からの警戒や経済的制裁が高まる危険性があるという板挟みの苦しみを味わっている。そして、目的地へ向かう人々の経路地として、国境に留め置かれる人々の一時避難地として必然的に役目を担わされるボーダーランドは、歴史的にも要塞や経路地としての役割を「担わされ」、それ故に「中心」

の政治的思惑が鮮明に表象される場所でもある。「中心」は勝手に境界を引くが、そこには日々の生活を営む人々があり、生活圏を分断されることもある。

アンビバレントでときには唐突な印象をうけることもある地域文化の表象は、「中央」から常に線引きの対象となり、大国の軋轢の間で緩衝地と機能させられる「ボーダーランド」(境界設定される土地)の必然的な姿でもある。むしろ、地域文化が一定の一貫したものであると仮定して、他者がまなざすのであれば、それは研究者の立場が「中心」に依拠している視点の鏡であり、そこで暮らす人々の生活と智慧としての複層性と曖昧さこそが「ボーダーランド」の地域文化ではないだろうか。中心からみた「ボーダー」、「バウンダリー」、「辺境」ではなく、自らの選択ではなく、あくまでもボーダー、辺境に「されてしまった」歴史と踏みにじられないようにする曖昧な文化的複層性の表象をもつ空間、地域をしめすことばとして「ボーダーランド」が見出される。「境界」を線としてとらえるのではなく、そこに生きている人々の生活圏があるとして、地域の主体性の表象として「ボーダーランド」と名付けたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

定松文、文化の政治的選択と社会空間 - ラトビアにおける言語選択と実態調査をもとに、『恵泉女学園大学紀要』26 号、2015、査読有、pp.157-175.

定松文、Comparison of Periphery Regions and Nations in the EU、ヨーロッパ辺境地域における地域文化の越境性と境界性(課題番号 23530696)2011 年(平成 23)年度~2013(平成 25)年度)科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))研究成果報告書 2015、査読無、pp.4-12

小森 宏美、How robust or vulnerable are nation-states? Estonia and Latvia Revisited, Japanese Journal of European Studies、2015、vol. 3 査読無、pp.27-32.

小森 宏美、Differentiation in the Understanding of "Nation" After the End of the Cold War、ヨーロッパ辺境地域における地域文化の越境性と境界性(課題番号 23530696)2011 年(平成 23)年度~2013(平成 25)年度)科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))研究成果報告書 2015、査読無、pp.13-18.

ISANO Naoko、Luòc especial " per la lenga occitana, deterritorialización de la lenga regional,

Quaderns Per a l' anàlisi、4 卷 44、2016、査読無、pp.93-111.

佐野 直子、十全な<言語>から欲望の言語へ NPO 団体カランドレートによるオクシタン語教育運動の挑戦、名古屋市立大学人間文化研究科人間文化研究紀要、4 巻 27 号、2017、査読無、pp.91-117.

<http://www.nagoya-cu.ac.jp/human/graduate-school/research/vol27.htm>

中島 崇文、社会主義期ルーマニアの『史学雑誌』に表明された西の隣国と異なる歴史認識 ハンガリーの『トランシルヴァニア史』(1986 年)への反論をめぐって、学習院女子大学紀要、第 19 号、2017 年 3 月、査読無、pp.123 ~ 144 頁、

<http://hdl.handle.net/10959/4120>

あるいは

[http://glim-re.glim.gakushuin.ac.jp/handle/10959/4120?query=\(author:中島\)](http://glim-re.glim.gakushuin.ac.jp/handle/10959/4120?query=(author:中島))

〔図書〕(計 7 件)

中島 崇文、丸善出版、庄司博史編、世界の文字事典、ルーマニア語、2015、432.

赤嶺淳・佐野 直子、新泉社、海士伝 3 海士に根ざす - 聞き書き しごとでつながる島、2015、208.

中島 崇文、平凡社、柴宜弘、伊東孝之、南塚信吾、直野敦、萩原直監修、新版 東欧を知る事典、2015、976.

池谷 知明、西脇靖洋他、一藝社、新・西欧比較政治、2015、256.

小森 宏美編著、定松 文、佐野 直子、西脇 靖洋、学文社、変動期ヨーロッパの社会科学教育 - 多様性と統合 -、2016、124.

小森 宏美、西脇 靖洋他、北海道大学出版会、パスポート学、2016、272.

小森 宏美、青弓社、村上勇介・帯谷知可編、融解と再創造の世界秩序、2016、212.

〔学会発表〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

早稲田大学 教育総合研究所主催、教育最前線講演会シリーズ、第 20 回、変動期ヨーロッパの社会科学教育 多様性と統合、2015 年 7 月 4 日、早稲田キャンパス 14 号館 102 教室、小森宏美「多民族社会と歴史教育 パルト三国の事例」、定松文、佐野直子、西脇靖洋「地域アイデンティティと社会科学教育」

6. 研究組織

(1)研究代表者

定松 文 (SADAMATSU Aya)
恵泉女学園大学・人間社会学部・教授
研究者番号：40282892

(2)研究分担者

小森 宏美 (KOMORI Hiromi)
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：50353454

中力 えり (CHURIKI Eri)

和光大学・現代人間学部・准教授
研究者番号：50386520

佐野 直子 (SANO Naoko)

名古屋市立大学・人間文化研究科・准教授
研究者番号：50326160

(3)連携研究者

中島 崇文 (NAKAJIMA Takafumi)
学習院女子大学・国際文化交流学部・教授
研究者番号：90386798

西脇 靖洋 (NISHIWAKI Yasuhiro)

山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：40644977

(4)研究協力者

()